
盲目の彼？

春野夜風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盲目の彼？

【Z-URD】

N9027E

【作者名】

春野夜風

【あらすじ】

目が見えない彼と彼を見守る彼女の物語。

(前書き)

序盤は大暴れしてます（笑）

突然ですが、彼は目が見えません。彼というのは私の学校の先輩。
向日葵。^{むかひあおい}ヒマワリではない。自分で言うのも少し悲しくなりますが、
友達以上恋人未満、幼なじみな関係です。かという私は秋桜百合^{あきざくらひよつ}つ
ていいます。私はコスモスでもなければ、百合な趣味もないでのそ
の辺はよろしく。

「なあコスモスよ。夏休みだといつのに何故オマエは毎日の如く僕
ん家にいるのだ？」

おっす！ オラ向日葵！ 立ち位置は一応この話の主人公ってこ
とらしいからよろしく！ ちなみに目が見えない設定だぜ！ 何か
テンションがおかしいぜ！

「誰がコスモスか！」

「じゃあレズビ「死ね！」

相変わらず良いパンチだ。

「君の攻撃などお見通した。当たらなければ意味はないのだよレズ
ビ「なんで当たらないのよ！」

今度は蹴りできたか。しかし、スカートをはいているのにハイキ
ックとは如何なもんか。

「2度も同じ」とを言わせるなレズビ「しつ」
「...」

今思ったのだが、力クゲーみたいな動きになつてゐる。口の^田の口一キックを跳んで回避。すかさず着地。

「何が不満なのだ？ では、仕方ない。君に選択肢をやれり。君に用意された選択肢は2つ。僕にコスモスと呼ばれるかウルトマンと呼ばれるかだ」

ふと思つたのだが、コスモスって何代前だらうか。

「どつちもイヤよ！ てか、アンタ目が見えてないのに何で当たらぬいのよ！ 実は嘘なんでしょう！ 直田設定を軽くぶつとばしてんじゃないわよ！」

やれやれ、困ったお姫様だ。

「ではレズビ」「まだ言つか！」

おお！ 回し蹴りか。まあ当たりませんが。と思つたら回し蹴りの遠心力を利用した裏拳への連撃派生か。お見事。まあ当たりませんが。

「まつたく…これしきの」とで暴力に訴えるとは…はしたない

「誰のせいよ！」

こんな攻撃なんて目を瞑つても避けるのは容易い。まあ、びひりにせよ見えませんが。

「それにそんなに足技ばかり使って…サービスのつもりか？ ウルトマンからサービス担当の桃レンジャーにでもなりたいのか？」

ちょっとしたアピールか？しかし僕は目が見えない。残念ながら君のパンツはサービスたりえない。そして今気付いたが、サービス担当は敵の女幹部だと思つ

「ひとのセクハラ魔神が！……！」

“ヒュンー。”

ついに音速を超えた蹴りを修得したか。まあ意味はありませんが。

「まあいい。とつあえず落ち着け。君は何をしにきたのだ？　まさか殴り合いで青春しにきたわけではないだろ？」

コスモスの蹴りを左手で捕獲。僕の右手で百合の右腕を捕獲。そして軸足払い。バランスを崩したところで腕を引っ張る。重要なのは軸足払いをする直前に蹴りを繰り出した足を解放しておくこと。そうすると、あら不思議。コスモスが僕の胸に飛び込んできたではないか。

「これなら抵抗出来ないだろ。まあ、用件を聞いつか

どっちかといつも抵抗してたのは僕か。まあビーでもいいねー。

「べ、別に、暇だから来てるだけよ」

「おやかトウントレとは…たまにはやるじやないか。まあ、今は置いておくとしようつ

百合は葵の胸に顔を埋め、顔を赤くしていた。端から見たらイチヤーこてるようになにしか見えない。これで付き合っていないというの

だから世の中不思議だ。

「わざわざ僕のところに来なくて他にも友達いるだろ?」それには、本当のことと言つことをオススメする

「目が見えなくなつた代わりに彼が手にいれた能力。一つは聴力。目が見えた頃より明らかに良く聴こえるようになった。もう一つは人の心を読み解く能力。心の声が聴こえるなどといった超能力じみたものではない。人の心の動きを敏感に察知できるようになつたというものだ。一種の洞察力。

「邪魔なら帰るわよ」

解放された百合は葵が発した言葉に腹を立て、カバンを持つて部屋を出た。

「まあ待て。まだ話は終わっていない」

出たつもりだったが、葵に腕を捕まれる。

「何よ!」

「何処か遊びに行きたいならどうして僕のところに来たんだ? 僕と外に行くのは容易じゃないってわかってるはずだ」

百合の攻撃を容易く避けていた葵だが、外に出るとなると話は別。再度言うが、彼は盲目だ。

「さう言われると思ったから言えなかつたのよ……」

彼女の表情に影がさす。

「あのなあ、僕は気にしないけど、そういう軽率な行動は結構な確率で僕のような人を傷つける。気をつけた方がいいぞ」

「（…）ごめんなさい…」

「僕は気にしないって言つただろ？ それに、コスモスが良いなら僕も何処かに行きたいし」

「誰がコスモスよ！」

「そうだ。君はそうやって元気な方がいい。さあ、笑え。笑顔は皆が幸せになれる。そつあるために存在している筈だ」

「アンタは相変わらずお人好しね…どうして私にそんなに優しいのよ…」

せつかく影が消えた彼女の表情に再び影が。それは一人の過去に起因するもの。だが、今はまだ話す時ではない。

「僕が優しい？ 君は面白いことを言つねえ。僕が本当に優しい人物なら君との縁は切つていいよ」

彼は笑っていた。それが何なのか彼女にはわからなかつた。

「どうこう」と？

「君は素敵な人だ」

「い、いきなり何を言つてゐるのよっ！」

百合はまたもや顔が真っ赤だ。純情まつしげりですか？

「頭が良くて優しくて、スタイルも良くて、顔も可愛い部類に間違いないに入るだろう。さらに、謙虚で人当たりが良いところなどを見ると性格も良いと見受けられる」

分析結果を述べる学者のよつて淡々と言つ。

「そんなことな『君なら』『そんなことはない』。言い被り過ぎだ。自分はそんな立派な人間じゃない」と答えるだろう。しかし、それは自信が持てず、自分を否定しているにすぎない。自分を一番良く知っているのは自分であり、他人だ。自分のことを全て把握している人間などいやしない。もう一度言つが、君は素敵な人だ。少なくとも僕はそう思う」

「それが…何だって言つのよ…」

「君から自信を奪つたのは……僕だ。今になつても思つ、あの時もつと上手くやれていれば……と。そして……僕のことなど恐れさせてやれば楽にしてやれるのに。と」

それでも彼は彼女を側に置いた。自分の我が仮で彼女を傷つけ続けている。

「結構、何が言いたいのよ…」

「目が見えなくなつて色々なことが分かるよつになつた。僕は自分勝手でも一人じやない。…僕は幸せ者だつてことだよ。でも、僕が

君の心に鎖を掛けているのも事実。楽しいと感じてくれている」と
を祈るだけさ」

・・・

束の間の沈黙。

「いつまでもシリアスなのは君には似合わないな。さあ、僕を何処
かに連れていくてくれるんだろう？ なら今日は双方楽しもうじゃな
いか」

彼女に手を差し出す。外に出るならそうした方がいいから。

「どうして私がアンタをどうかに連れて行くと思うのよ」

「君はそういう人だ。僕はそう思つよ」

「まったく…あんたには敵わないわ」

彼女は彼の手を取り、家を出る。

「ねえヒマワリ」

今は夏休みなだけあって、結構な人の量だ。繋ぐ手の力も一層強
くなる。

「ん？ 何かな？」

彼は彼女が強く手を繋げ「うともそのままだ。

「目が見えない人って杖とか持ってるイメージがあるんだけど、な
くても何とかなるもんなの？」

彼女が言うように彼は杖を持っていなかつた。普通ならあり得な
い。

「杖があつたら人は自然と避けてくれるし、障害物があつたらわか
るし、逆に持つて無いと確実に事故るね」

「じゃあ持つてないとダメじゃない！」

急いで家に引き返そうとする丘合。

「無くても大丈夫だよ。僕は君のことを信頼してるからね。僕が杖
を持たないのは君と出かける時だけだよ」

「つぱずかしいセリフを平氣で言えるコイツは策略家なのか天然
なのか…。

「ま、ますます緊張してきた…」

「そ、うか。君が恐がるという可能性を考えていなかつた。これは失
礼した」

何処からか杖を出す。ちなみに、何処から出したといつシッコミ
は無粹というものだ。

「その杖どつから出したのよ…」

それでもツッコむ彼女はマジヨリティー。

「杖つて役に立つんだけど、結構邪魔なんだよねえ」

「無視かい！」

「痛い！ 暴力は良くないよ。杖くらいいつでも持つてるさ」

頭を叩かれる葵。

「…何でいつもみたいに避けないの？」

そう。こつもの葵なら彼女の攻撃などいとも簡単に避けて反撃を繰り出す。

「君はそんなんとこだけ鋭いね…。家中と雜踏の中だと状況が全然違う。下手なことをすれば事故にあつ。正直に言つと、この手が離れてしまつのが怖いんだ」

さつきまで一方的に握られていただけの手に力が入つている。

「絶対離さないから安心して」

家中ではあんなに自由に動きまわっていた彼が外ではこんなに弱くなつていて。状況といつものほどの人間を変えてしまうものなのだ。

「情けない話だが、外に出るのは慣れてないんだ」

「私がしつかりエスコートするから」

「それはそれで情けない話だ…」

男のプライドもなにもあつたもんじやない。

「ねえ、今更なんだけど…楽しい？」

彼は外は怖いと言つた。なら、外に連れ出しても何も楽しくないのではないかといつ不安が生まれる。

「そうだねえ…。僕は基本的に君がいれば何処でも楽しいよ」

「えー？ そ、それってもしかして…？」

「君ほど楽しい人は今まで見たことないしね」

百合ちゃん撃沈のようです。

「まあそりゃうるさい…。いつもおちょくられて楽しんでるもんねえ…」

「君こそ僕と一緒にいて楽しい？」

彼と一緒にいても出来ることは物凄く少ない。視力を必要とされるものはほとんどできないのだ。

「楽しくないならわざわざ夏休み中入り浸つたりしないわよ

「そうか。なら良かつた。これからも一緒にいてくれると嬉しい

「なつ！？ それはもしかすると……」

「君ほどイジリがいのある人はいないからね」

百合けいやん残念！

「アンタねえ…乙女心を踏みにじつて楽しいー？」

「えー？ いきなりじつしたんだよー。」

彼は天然のようです。

「私の反応見て遊んでるの！？ それは性質悪いわよー！？」

彼女はフンと鼻を鳴らせて行ってしまった。

「どうして怒つてたんだろうか…。やっぱり僕といたら古傷が痛むのだろうか…。やはり嫌々だったのだろうか…」

タイミングが悪すぎたとしか言い様がない。今のタイミングで彼女が怒りだしたのはとても良くない。希望を掴んだ彼を絶望に叩き落としたも同義だった。

「どうやつて帰る？…」

知らぬ場所。知っているのかもしれないが、わからない。携帯はあるが、彼が連絡出来るのは病院・両親・百合の4択。両親は仕事。病院にかけるようなことではない。百合にはもう頼れない。立ちすくむしかなかった。

「ハア……勢い余つて置いて来ちゃつたけど……」

今更戻るのも氣恥ずかしい。

「杖があればまあ帰れるだろ?。せつかく来たし適当にぶらついて
帰ろ……」

彼女は大きなミスをしてしまった。今はまだそれには気づかない。

何時間経つただろうか。今何時だろ?か。近くを通つた人に道を尋ねてみた。しかし、3つ目の曲がり角とか言われてもよくわからなかつた。下手に動きまわらない方が良いだろ?と判断してずっと同じ場所にいる。近くに座れそうな場所を見つけたのが唯一の救いだ。

「かなり涼しくなってきたから夜だろ?か」

何処だかわからな?いが、ずっと同じ場所に座つて?いるのはさぞかし怪しい人に見えるだろ?。

「困つた……警察のお世話になるしかないのかな……」

そんなことを考えているとき、ポケットの携帯に着信が。

「やつぱり謝ひなきや。勝手に帰つてしまひたし、ヒヤツも帰るの」苦笑してだらりと……

数回の着信音。

『はー。もしもし…』

「…私だナビ…」

やつぱり返事…。

『今日は向か怒りせひたみたこで「ダメ」』

私が一方的に怒つてただけなの…。

「私こそ…勢い余つて逃げあがへじめんなさー…」

『それはいいんだ。僕のせいみたいだし。それより、今何時?』

嫌な予感がした。

「…え? 今…向處にいるの? 家にいるよな?」

『君とわかれだといひだけビヘ』

…あんなどこかあつといた? 今まであつと…? 何時間経つてゐと思つてゐの? …

「…え? 帰らなかつたの?」

『情けないことに帰り方がわからないんだ。警察とか呼ぶようなことでもないし』

「い、今から迎えに」

受話器の向こうから誰かの叫び声が聞こえてきた。電話はここで途切れだ…。

・・・

「…え？ 嘘でしょ…？」

心臓の鼓動が速くなる。緊張が走る。嫌な汗が止まらない。

「でも…あそこは…」

彼らが分かれた場所。そこは車の通りが激しく、事故が多発している場所だった。

「急がないと…」

「これは…そんなのって…」

急いで駆け付けた先。そこには真っ赤な血だまりが。

「また…また私のせいだ…」

今度は彼女がそこから動けなくなつた。彼の姿はなく、警察が事情を聞いていた。そこに座つていた誰かが飲酒運転車に突つ込まれたらしい。

「そんな…」

彼の目が見えなくなつた理由。それは、彼と彼女がまだ幼かつた頃、不用意に車の前に飛び出した彼女を救うため、車道に飛び込んだことにある。車と接触することは回避出来たが、彼は頭を打つた。当時は何もなかつた。しかし、ある日を境に彼の視力がどんどん低下しだした。そして遂には光を失つた。

彼は、彼女の命の代償としては安いものだ。と言いきつた。

彼が何と言おうとも彼が視力を失つたのは彼女のせいだ。大人どうしの醜い争いもあつた。彼女は自分の犯してしまつた過ちに潰されそうになつたこともあつた。彼はその全てから彼女を守つた。彼にはそう出来るだけの能力があつた。彼はやろうと思えば何でも出来た。

彼が彼女を縛つていたのではなかつた。彼女が彼を縛つていたのだ。彼に守られていなければ彼女は生きていられなかつた。彼は彼女を守つていてるうちに他を失つていた。

「ここは何処だ…」

彼が目覚めたのは病院のベッド。身体中に痛みが走る。

「病院か…」

身体は包帯でグルグル巻きだった。

「これは……誰だ…」

長い黒髪。細い腕。おそらく女性だろう。その人が椅子に座り、ベッドに伏せになつて眠っている。

「…こや、ひょっと待て」

彼は一度目を擦る。

「やつぱつ……目が見える…」

事故が原因で視力を失つて、事故で視力を取り戻すとは…皮肉なものだ。

「それより彼女は誰だ?」

母ではない。悪いがこんなに瑞々しい肌じゃない。ヒヤると…

…

「コスモスか!?

「オイ、起きる」

顔を見ると随分と青白い顔をしていた。

「コイツは…何で状態で病院来てんだ…」

いや、逆に病院だから体調悪くて当然なのか?

「とりあえずナースコールだな…」

「さて、落ち着いたか?」

「はい…落ち着きました…」

あれから看護師に自分の様態を確認したところ、3日ほどずっと寝たままだったらしい。それはそれと、百合を自分のベッドに寝かせ、点滴をうち、田が覚めて薬の顔を見た瞬間こっちが引くくらい泣きだした。で、田が見えるようになったことを説明するとまた泣きだしてと大変だった。

「や、それよりどうして急に視力が回復したの?」

「僕にもわからないんだけど、先生は事故で頭を打ったせいじゃないかって言つてた。やっぱり百合には感謝しないとな」

「そんな! 私のせいで右足骨折したし…全治2ヶ月だし…。って今、百合つて言つた! ? 言いました! ?」

…そんなに何を驚く?

「いつも呼んでたつしょ?」

「いつもコスモスとか君とかばっかりだつたよー。」

「うだつけるかなあ?」

「まあいい。気にするな」

「何か釈然としない……」

「寝不足なんだろう？　まだ寝てるといい」

「ん。やつやせてもいい」

せじわじ、目が見えるようになったことだし、これからどうしようかな。

おしまい

(後書き)

ふと見てみたらニークアクセス数が777でした。

何か良い事ありそうな数字ですね（笑）

それにも、ありがたいことです。

嬉しい限りです。

これからも春野夜風をよろしくしていただけると春野は喜びます。

評価・感想いただけると感謝感激です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9027e/>

盲目の彼？

2010年11月17日14時09分発行